

閉校と 同期会と

昭和28年卒

酒井 英子
(旧姓 渡辺)

二十八年卒同期会の模様を、「還暦記念(?)同期会顚末記」と題して、「ともかき」に載せていただいたのは、平成六年十月号であった。

あれから十三年、あの時還暦を祝った女性たちは、古稀も過ぎいまや七十代半となった。

平成七年来、毎年開催することになっている同会が、昨年十月、二十一回目を迎え京王線笹塚駅近くの「アムール」で開かれ、(こ)は、同期会幹事 大高さんの亡きご主人が遺された純喫茶店である。(低)廉な会費と家庭的な雰囲気の中で、女性十九名がおおいに語り、食し、時の経つのを忘れたのだった。

今回は、卒業生一一六名に対し、はがきを送った数七七、出席者数一九、欠席者三七、返信の無かった人二一、亡くなられた方八名(内 お二人は、今年の春)

であった。

出席者のお話と、欠席者のお便りの中に多かったのは、ご両親、お連れ合い、ご姉妹などの介護、ご本人のご病氣・体の不調などであった。ご主人を亡くされた方もいらっしゃる。勿論、ご健在で社長・顧問など現役でご活躍中の方、和裁・リフォーム教室を続けられている方、コース、囲碁、習字、食べ歩き、山登り、水泳、太極拳、ボーリング、ハングル文字の勉強、水彩画、俳句等々趣味を楽しんでいる人は、枚挙に暇がない。

まさに人生いろいろ、七十余年の歳月を感じさせる。

昭和二十四年、都立第六新制高等女学校に入学したメンバーは、その殆どが、昭和八・九年生まれで、戦時中は良妻賢母教育を、戦後は男女同権を叩き込まれ、貧困、高度成長、バブル崩壊など、混乱、

動乱、狂乱を潜り抜けた今、高齢化社会の只中にいる。

昭和四年夜学校として発足し、何回かの学制改革の中で時代のニーズに添えてきた三田高校の閉校を目前にして、その変遷を考えると、時代の流れの渦中で懸命に生きてきたわが昭和一桁世代と重なって見えはしないか……

今年十月 最後の「ともかき」が発行される頃、二十八年卒同期会の二十二回目が開催される。

昭和38年卒
小林 昭子
(旧姓 島村)

生徒、保護者、同僚、友人や知人そして家族に支えられての三十五年間の教員生活を退職して一年半。腰部背柱管狭窄症の治療をしつつも、九十五歳と八十五歳の二人の母を週二回見舞い、より長寿を願えること、

家族の食事づくりに専念できること、好きな時に読書や美術館巡り、多少の旅行ができることの現在が夢のようだった。

例えば、今日の私があるのも、三田高での四年間があったからこそと痛感する。人間形成の根幹が培われた時期でもあった。恩師と未だ続く「ともかき」との出会いに感謝して余りある。この思いを「心痛むニュースの多い昨今」微力でも何か行動に、身の丈ほどにできる何かにとつながっていかなければならない。

猛暑の間中、枝一杯に花をつけた「木槿」に見とれては、中くらいなるオラが余生はこんなところかしらと。しかし、できたら申し分ない一生といえるにちがいない。

60の手習い

昭和43年卒

山中 益美

申し訳ないような成績なのに、情けをかけてくれたのか三田高校を無事卒業。卒業式の日に初フルマラソンに出場して、卒業式に出席していないせいか、卒業した実感が薄い。(ちょっぴり後悔もある?)

そんな思い出の卒業から四十年余りが過ぎ六十才になろうとする昨年、娘が調理師試験を受けないかと誘ってきた。鰻屋を開店して二十八年になるがそんなことは思っても見なかった。

いまさら勉強なんて躊躇したが、高校の時ころくに勉強をしていなかった罰として、挑戦することにした。勉強なんてする習慣が無い我が身にとって、参考書などの読み物の内容が頭に入らない。落語の速記本やカメラやパソコンの取説なら、二度読めば頭に入るのに。肝心な事になると頭に入らないのだ。とにかく悪戦苦闘と言う程ではないが参考書を暇を見つけては読んだ。当然の事ながら参考書等と云うものは、読み物としては全くつまらない。高校時

代に、級友達はきつこのつまらない読み物を読む習慣があったのだろうと考えるつくづく偉いと思う。

そして二〇〇六年暮れの試験は娘共々、失敗。二〇〇七年六月の試験で二人とも合格だったのはなによりだった。

これでどちらか一人不合格となると……

この試験の書類に卒業証明なるものが必要だった。

これを頂くために学校にお願いをし、それが送られてきた時にまた、あゝ三田高校の生徒だったんだ。そして、この学校を卒業したんだと実感し、なんだか判らないが感動した。こんな感動を味わえたのも六十の手習いのお陰かも知れない。

四十三年卒業の仲間達、左のHPを見ると当時の写真が見られますよ。
<http://park11.wakwak.com/~unagiya/>

